

制が日中戦争期の総力戦態勢と近似していた、と読み替えるならば、多くの実証研究によって証明されつつあると言つてよいだろう。また、朝鮮戦争が社会主義体制を構築する直接の契機となつた、という見解についても、幾つかの論稿が、様々な業界において私営企業が抹殺される契機となつたのが朝鮮戦争であつた事実を指摘し、本書の説を肯定的に評価している。総じて、本書が示した大胆な説は、着実な実証研究によつて裏付けられつつあると言つて良いだろう。このように本書は、中国現代史のアウトラインを戦争と社会主義というキーワードによつて大胆に描き切つた好著である。その割り切りのよさ故に、例えば、中国の政策を左右した要因として国際環境のみが突出している、という印象を受けなくない。その意味で本書は、分かりやすい叙述を目指すが故に、捨象している部分も少なからずあつたように思われる。しかしそもあれ、中国の現代史をこれほど明瞭かつ説得的に解説した書はこれまでになかつた。中国研究者だけでなく、より幅広く読まれるべき著作である。

(松村史穂)

注(1) 奥村哲「抗日戦争と中国社会主義」『歴史学研究』第六五一号、一九九三年一〇月。

山代宏道編

『危機をめぐる歴史学

——西洋史の事例研究——

刀水書房
二〇〇一・八刊
A5 三三二頁 五七〇〇円

本書は、「西洋の歴史叙述にみる「危機」の諸相」というテーマで長年積み重ねられてきた共同研究の成果の一部である。主とて古代史もしくは中世史を専攻する十五人の研究者による個別論考は、その内容にして古代史もしくは中世史を専攻する十五人が突出している、という印象を受けなくない。その意味で本書は、分かりやすい叙述を目指すが故に、捨象している部分も少なからずあつたように思われる。しかし

第一部 「危機は存在したのか」

堀井健一「トゥキュディデスの前四一一年アテナイ政変の記述にみるポリスの危機」は、紀元前四一年にアテナイにおいて

て生じた一連の政治情勢に対する歴史家トウキュディデスの危機意識を探るべく、これに関連する史家自身の叙述を中心に、アリストテレス『政治学』を参考にしつつ、コミニケーション——理想国家論に見るポリス的統合の危機意識——は、ポリス内のコミュニケーション『法律』とアリストテレス『政治学』における理想的ポリス統合の在り方を、紀元前四世紀に優勢となってきた「縦の統合原理」と対照させ、これら哲学者たちの危機意識を分析したものである。豊田浩志「あらわし危機管理へ」という三つのカテゴリーに分類されている。以下、それぞれを構成する各論考を紹介したい。

第一回 「危機は存在したのか」

ティヌス『神の国』にみる危機意識』は、ポシディウス『聖アウグストゥスの生涯』からの推察も根拠としつつ、『神の国』一

新刊紹介

一一四(四〇)

卷を中心にアウグスティヌスの執筆意図、そしてそこに見られる危機認識を読み取り、これに即してローマ帝国崩壊期における「危機」の諸相について論じようとするものである。岡本明「ナポレオン支配期ベルク大公國官僚群の危機認識—隸農制廃止を巡って」は、ナポレオンの中欧経営のための「人工國家」の一つ、ベルク大公国においてなされた、フランス支配或いは改革遂行、とりわけ隸農制改革に対する、プロイセンを主な出身とする官僚たちが如何なる危機認識を抱いていたのか、改革派・実務派・守旧派に分類し、分析を試みたものである。

第二部 危機意識と危機の叙述

宮地啓介「海の覇者アテナイの危機と軍船乗組員—トウキュディデスの戦力觀を手がかりに—」は、海を支配する者が世界を制霸するという海洋制覇史觀を有したトウキュディデスが、アテナイの海軍力の脆さや弱点について如何に意識していたのかという問いを、とりわけ危機的状況における戦士の自覚の問題、及び同盟諸国出身の外国人乗組員を多く抱える軍船乗組員の信頼度の

問題を中心に扱っている。小河浩「デモステネスとイソクラテスの叙述における傭兵とボリスの危機」は、傭兵が例外的存在であり市民軍は健全に機能していたとの理解に基づき、両弁論家による傭兵に関する叙述を、ギリシアの内乱、マケドニアの台頭といった個々の危機への対処という視点から読み、そこに込められた意味を探り、これを通じて諸ボリスの衰退と歴史的危機と傭兵との関係を論ずるものである。小崎閏一「ルイ六世治下における王権の危機とサンニードニ修道院」は、サンニードニ修道院長シュジエールの遺した『ルイ六世伝』を材料とし、フランス国王ルイ六世がその統治期に直面した、イングランド国王ヘンリー一世に対する敗北とドイツ皇帝ハインリッヒ五世のフランスへの侵攻という二つの対外的危機状況を論じる。佐藤眞典「中世イタリア都市国家形成期の歴史叙述と危機の諸相—キュウビック・フォームによる研究試論」は、北イタリア諸都市に関する記述を提供する『皇帝フリードリヒ一世事績録』、『フリードリヒ一世の歴史』、『良き習慣の書』という史料群を用い、そこに看取され

る描き手の危機意識に注目する。考察の分析道具として「危機の諸相のキューブ」を考えし、危機の構成要件やそれに対する対処方策を細分化することで各事例の個別性を測る点が特徴的である。友田卓爾「イギリス革命初期における民衆の政治化と国王・議会の危機意識—ホワイトロック『メモリアルズ』に見る革命的危機」は、革命初期において顯著となつた一般民衆の政治的活動が当時の支配者集団に抱かせた危機意識を、下院議員ホワイトロックの書き留めた『メモリアルズ』のなかに読み取る試みである。

第三部 危機克服から危機管理へ

山代宏道「ノルマン征服をめぐる「危機」の諸相—歴史叙述と危機管理」は、ノルマン征服過程における諸事例を題材に、危機管理とリーダーシップ、異民族・異文化接觸、歴史叙述に見る危機認識と危機管理という三つの観点から分析された著者自身による一連の研究成果を、総体として再考する試みである。宮城徹「ウイリアム一世治世初期における貴族反乱と危機」は、ウイリアム一世治世初期におこった三つの

地方貴族反乱の事例から、王権の地方に対する支配権力の拡大によって生み出されたと考えられる「危機」の実態を明らかにすることで、異民族間の対立と捉えがちであった旧来の歴史観に疑義を呈し、中央権力と地方権力の相剋をノルマン征服の進展過程の中に位置づける。大宅明美「十三世紀都市ラ・ロシェルの政治的危機と経済的危機」は、ラ・マルシュ伯をはじめとするボワトゥ・サントンジュ地方在地有力者層によるフランス王権への反乱計画を密告したラ・ロシェルの一住民による書状を史料とし、都市の経済的基盤となるワイン生産に影響を与える政治的問題に対して、都市民がどのような危機意識を抱いていたのかを明らかにする。井内太郎「十五世紀後半期イングランドにおける宮内府改革との意義—政治的危機克服の試み」は、イングランド宮内府による布告群を検討材料としながら、十五世紀後半の政治的、それに伴う経済的危機状況のなかから、どのようにして中央権力による政治的危機の克服が試みられるに至ったのかを、チャーチー朝との連続性の中で整合的に捉えよう

とする。長田浩彰「ユダヤ人」とされた人々の危機意識—第三帝国下（一九三三—一九）の「非アーリア人」キリスト教徒のアイデンティティ危機—は、体制側の許可を得ることで三三年に設立された「非アーリアないし不完全アーリア系のキリスト教徒・ドイツ国民連合」（その後三九年まで何度も名称を変更しながら存続）という組織の展開過程を軸にすえ、その枠内で生き延びようとした「非アーリア人」キリスト教徒の行動とそのアイデンティティの変遷を跡付けている。以上の内容紹介から明らかなように、論者の専攻と議論の指向性は多様であり、それぞれをつなぎとめるのは「危機」という非常にゆるやかな意味内容の言葉である。それらを三つのカテゴリーに収斂させ、一つの研究論集に纏めあげた点は評価されるべきであろう。欲を言えば、幅広い研究者による共同研究であることを踏まえ、各論考で取り扱われた「危機」に関する比較や、あるいは各研究者間の意見交換など、さらに一步踏み込んだ考察の場を設けても良いかったのではないかろうか。

（佐藤 昇・小澤 実）

杉谷綾子著

『神の御業の物語——スペイン中世の人・聖者・奇跡』

現代書館 二〇〇一・二刊
四六三六八頁 三〇〇〇円

サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼については既に多くの研究が書かれているが、多くは巡礼路の起点とされるフランスから見た視座に支配されていて、地元イベリア半島の社会や精神の独自性が軽視されてきた。筆者はイベリア半島の人々が古代末期から中世末期にかけて、聖人の引き起す奇跡をどのように考え、信じ、利用していくのかを、年代記、奇跡書、聖人伝など多くの史料を分析し、時に史料が語らない民衆の心性の動きをも交えつつ、歴史的な背景のうちに考察している。

第一章で筆者は本書のキーワードである「奇跡」について、「中世人にとっての神聖な表象的諸要素をふくむミラクルムを総称して奇跡と呼ぶ」とし、意図的に明確な定義づけを避ける。そして新約聖書の編著者やラテン教父たちは、「奇跡」を通して危